

印協會會報

第八十八號



次
目

昭和十九年十一月三十日發行

口 緒

○風の宮殿

○ボース首班大講演會

○

○ボース首班小磯首相と會見

○假政府成立一周年記念式典

卷頭言

- 印度先住民族の強力性.....文學博士 高橋順次郎...四
- 印度進撃の決意を語る.....自由印度假政府首班 スバス・ボース...三
- 現段階に於ける對印度文化工作に就いて.....鶴源次郎...二
- ヒンズ・政治制度と其の理論(III).....ビー・ケー・サルカル...三
- 印度回遊五千哩(九).....谷一東...六
- 雜誌.....
- 八月初旬の印緬戰況○英國東洋艦隊の増強○米國民間人の對印關心○印度と世界情勢○在緬印度人の決議○米國と印度○米國の對英報復決議案○在米印度人の活動○フイリップス召還問題
- 反権輜の戰爭目的と印度○孟賣會談決裂の主要原因○英國議員のフィリップス彈劾○蘇聯との使節交換說○ヒンズ・マハバもガンダーハに反對○印支空輸物資○ニコバル島附近の戰果○小機官相等ボース首班を激賞○ベー・モウ國家代表の聲明○ボース首班滅敵の決意を表明○自由印度假政府職時委員會○チャーチルの戰況報告
- 印度緬甸方面日誌.....
- 會務記事.....
- ボース首班大講演會○ボース首班一行歡迎晚宴會○邦樂進出問題研究會○庄司理事の逝去○會員の訃報

高

高

出し様が無く防害も不成功に終つたとのことである。

英國の遣り方は常にこれである、しばしく起る印度教徒と回教徒との争も英國側の策謀に依ることが多いと言はれてゐる。

次の日、ミシユラ氏は彼の友人でその子供が日本へ留学して居る人が是非私達に會ひたがつて居るからと言つて、城外の新しく開けたらしい近代風の住宅街にあるその人の處へ連れて行かれた。

その家でも私共が面會じたのは日本へ留學してゐる人の兄とその父親との男達だけであつたが、舊知に會ふ様な親しさで色々と日本的事情を聞いたり、自分の子供の事等話した、その子供は東京の工科大學に入學してゐるとの事であつた。日本へ歸られたら息子には非會つて呉れと頼まれた。

これは後日の事であるが、私は歸國後此の學生に會つた、非常に感じの良いの良い青年であつた、日本語も自由に話せるし、漢字も相當讀めるらしく、大岡山の工大で應用化學を勉強してゐるとの事であつた。

此の家からの歸途を私共が泊る約束をして居た、ニューホテルに立寄つて支配人に面會した、彼はミシユラ氏と同年輩位で背の低いガツシリとした體格の持主である、若い頃は船員であつたとか、從つて大分世界も廻つてゐる、日本郵船にも數年間勤務した事があると言つてゐた。私共の訪問を非常に喜び色々と昔横濱や神戸に寄港した時の話等に華を咲かせた。

この様な言はゞ印度でも奥地と言はれる、土侯國の中に斯く多くの親日家を發見することは一つの驚きであると共に言ひ知れぬ喜びであつた。殊にミシユラ氏の地味な、そして眞に心からなる歓待は、それがほんの二日間ではあつたが、私共の心に強く深い友情を育て上げた。そして其日の午後五時頃の汽車でウダイプールに向け出發した時は數年來の舊友に別れる様な氣持であつた。

ソーマ神の歌

彼の強くして撓まざるものは・野牛の如くに進出でたり・黒き革を排開きつゝ。
我々は思ふ・幸ある路に向て・越え難き岸を過ぎたりと・數の電光は天に冲せり。

バヅマーナ(淨灘)の音は・唸りつゝ・雨の如くに聞ゆ・そへなきダシニユ(奴)を打破りつゝ。

瀧麗はしきものよ・斯く自らを淨めよ・而して偉大なる天地を滿たせ・スールヤ(日)がウシャス(曉紅)を光輪を以て力強き酒を濾出だせ・滴が搾られし時は・牛もあれ・黃金もあれ・馬もあれ・力もあれ。

蘇摩よ・我々を繞りて護れる小川に由て・一切の方面にあ流れ來れ・恰も銀河が高空を繞る如くに。

(梨俱吠陀九・四一・一一六)

雜纂

八月初旬の印緬戰況

緬甸印度方面の戰線は大別して、

(一) アキヤブ正面地區

(二) インペール正面の攻略戰

(三) フーコン地區の擊滅戰

の四主戰場となり、目下の戰況は敵のレド公路打通企圖の擊滅を中心

に彼我の戰闘が活潑化して居る。

一、アキヤブ正面 現在ブナギン西北方よりブチドン北方を經て、

モンドー南方約十キロの線に於て敵と對峙して居る。

此の正面の敵兵力は約二個師で其の行動は活潑ならず、附近には敵の著しき動きが見られない。カラダン河谷方面に於ては國境線外約三キロのモウドク附近に於て少數の敵と接觸して居るが、此の方面に於ける敵の動きも緩漫である。

一、インペール正面 インペール平地の四周及びインペール、コヒマ道中邊などに於て敵に多大の打撃を與へ、此の方面よりする敵の緬甸侵寇作戰企圖を挫折せしめ現在は第一線を東北方はウクルル南方地區、東南方はパレルータム道及南方はビションプールトンザン道の隘路口附近に於て我方に近接し來つた敵と對峙して居るが、此方面の敵の行動も其後不活潑である。

八月初旬の印緬戰況

一、フーコン南方地區 我軍はカマイン南方約四十キロ、ニンウタ東西の要點を占領し、フーコン地區より進出して來た重慶軍及西阿軍並に先にカーナ附近より後退北上した落下傘殘存部隊と對峙して居る。此の前面の敵の戰力は現在半數以下に低下して居るが重慶軍二個師團と落下傘部隊一個旅及西阿軍一個旅の部隊で、敵の損害は既に五萬にも及んで居る。敵は其の主力をモガウン、カモイン等に集め部隊の整備を行つて居る模様で行動は活潑でない。ミイトキーナ市街は我方寡兵を以て依然よく之を確保し敵の猛攻に對し敢闘を續けて居る。ミイトキーナ周邊に進出の敵兵力は戰力著しく低下して居るが、其の部隊數は重慶軍二個師、落下傘二個旅及米軍一個旅。

一、騰越方面 謂越、拉孟、龍陵、芒市、平戛等の要衝を確保し透し來る敵を捕捉して之に甚大なる損害を與へて居る。現在謂越周邊の敵兵力は三個師、拉孟周邊一個師、龍陵周邊四個師、平戛周邊二個師で此の優勢なる敵に對し我方は寡兵よく勇戦、敵に甚大なる打撃を與へつつある。レド公路はミイトキーナより謂越、拉孟方面に通するが、雨季明け前にたとへ敵が緬甸國內に道路を開通し得たとしても怒江正面に我軍が地歩を確保して居る限り國境以東地區方面的打通は敵に取つて不可能である。

一、航空作戰 目下雨季の爲航空作戰は活潑ではないが敵は轟撃機を利用して主力を以てフーコン地區の作戰に協力すると共に印支空軍の増強に躍起となつて居り、第十飛行師團のアッサム駐進も此の現れである。而して目下我軍は支那大陸に於て在支米空軍に甚大なる打撃を與へつて居るにも拘らず、敵空軍の戦力の回復が比較的早く行はれて居るのを見ても如何に敵が印支空軍に全力を

(四三)

擧げて居るかと判る。一方之に對し我航空部隊も雲間を見て好機を逸せずミイトキーチ敵飛行場インドウジ湖周邊の敵着陸場等を攻撃し相當の戰果を擧げて居る。印度國民軍また熟識を以て引續き我軍に協力、特にペレル正面カラグン河漢方面に於て其の活動は大に目覺しきものがある。

英國東洋艦隊の増強

ロンドン・タイムズ紙は去る八月二日第一面に「東洋艦隊」と題する論文を掲げ、次の如く述べた。
「大將詹姆斯・ソマーヴィルに代つて大將ブルース・フレーザーを東洋艦隊司令長官に任命した事は世界戦に於ける海軍戰略の重點が大西洋並びに英本國水域から東亞に移つた事を示すものである。
(中略) 主要艦隊の提督を本國本域から印度洋に移した事は少くも早かれ遅かれ海軍力の移動が行はれることだけは示唆して居ると言ふ見透しが今回的人事異動に依つて漸く東洋艦隊は物的勢力の最高水準へよう。而して此移動に依つて漸く東洋艦隊は物的勢力の最高水準にまで齎らざれるであらう。現在問題になつて居るのは海軍だけであるが、海軍の移動に應じて陸、空軍も同様に移されることであらうと云ふ見透しが今回的人事異動に依つて示唆されるに至つた。前東洋艦隊司令長官ソマーヴィルは赫々たる戰歴を有して居るが、彼は一九四〇年の夏以來絶えず前線で指揮を取つて居るのであり、而も後任者ブルース・フレーザーより七歳も年上である。ソマーヴィルは、而も有能なブルース・フレーザーと代る時期が來たといふ事は考慮の餘地が無い。然し英國にとってソマーヴィルの働く處が無い譯では無く恐らく近く新たな地位に就くであらう。」

案の審議は一段と促進されよう。茲に貴下に對し印度要人の即時釋放を本國政府に傳達するよう要請する所以である。」

印度と世界情勢

八月十三日ボース首班は「印度と世界情勢」と題する聲明を發表し、左の如き見解を披瀝した。

「這次大戰に於ても第一次大戰と同様に不屈不撓の精神力を有する國民が勝利を得べきものである、從つて英米が其の巨大なる生産力を呼號するも結局敗北を喫するのは疑問の餘地が無い。即ち歐洲戰局に於ては獨逸打倒は言ふに易くして實行困難なるを知らしめるであらうし、又赤軍が今後一層の成功を収めたとしても相互間に諒解なきソ聯と英米の間には摩擦と紛糾が必然的に生ずるであらう。何れにせよ歐洲の將來に關して確かな事は英米の勢力が一掃される事である。其と共に東亞戰局に於ても米軍の一寸刻みの戰法にも拘らず日本の蓄積された力は機會と場所を捉へて最後の止めを刺すであらう。現下の情勢は権側に局部的には必ずしも有利では無いが自下日本に於ては解放された東亞諸國に於て此決戰に處する大規模な準備が進められて居る。日本並に同盟國の政變は其の準備の一つである。然して我々印度人の任務も是と同様で危機に面して全印度人の物的、人的、總動員を一層強化することである、此點東亞に於ける印度人の士氣が今日程昂揚して居る時は無いと言つても過言では無い。只不幸な事は東亞の印度人が持つて居る最後の勝利への不動の確信が古き印度國內の指導者に共有されて居ない事である。此弱點から彼等の間に英帝國と妥協を策する傾向が現はれて居るが、假令斯る妥協が成立したにせよ、印度民衆の大半は之に賛成せぬであらう。

印度と世界情勢 在緬印度人の決議

抑々二年前の『討英要求』は一部指導者の決議ではなかつた。又獨立か妥協かの問題は一九二九年十二月國民會議派大會採擇の完全獨立決議によつて既に決定となつて居る。現在一、二の指導者が如何なる事をしようとも、印度國內の大衆はラホール決議に背くことは斷じて無い。右決議を遵守して東亞の印度人並に國民軍は印度が英米の桎梏より脱却する日迄戦ひ続けるであらう。古き指導者が失望落膽した所以は非軍事的不服従運動が獨立獲得に失敗したからであるが、我々には別の手段が有り既に自由獲得の爲に武器を取つた我々は決して失望しない。對英妥協を策する人達は迂闊にもバキスタン案を承認しもつて回教徒聯盟と提携して英國政府を御しようとは無い。印度民衆が固く結びついて居る『印度人の爲の印度』と云ふ理想は我々が國民的團結をもつて戰時並に戰後の再建に戰ひ抜いた場合のみから得られるのである。妥協主義者やバキスタン信奉者は達が如何なる言辭を弄さうとも我々は國民の大半が双手を擧げて断乎邁進するであらう。」

在緬印度人の決議

自由印度假政府樹立記念民衆大會は八月二十一日緬甸某地に於て開催され、席上次の如き決議が可決された。「本民衆大會は自由印度國民軍將兵に對し、其國境及び印度内各地域に於ける六箇月の善謀勇戰に深甚なる敬意を表す。日印軍が攻擊を續行せる限り敵軍は各戰場で敗北を喫し、過去に於て経験せる此の事實は印度人並びに自由印度國民軍の自信を十倍も昂めるに至つた。一度敵軍を打破せ

八月七日發リスボン電報に據れば、印度政府が國民會議派の領袖を一網打盡に逮捕した八月八日の二周年を前に、米國各界代表者百

十名は英國大使ハリファックスに公開状を交付、會議派領袖の釋放を要求した。右公開状に署名して居るのは米國に於ける印度聯盟の會長J・J・シンを初め、下院議員エマヌエル・セラー、學者ではアインシュタイン博士、著作家ではバール・バックその他である。

ヨーク來電に據れば聲明の要旨次の通りである。
「印度政廳が公判に付せず、會議派の領袖並びに黨員數千名を投獄してから正に二ヶ年を経過した、これ等黨員の多數は自由と民主主義とに對する信條を以て知られて居る。特にパンデット・ジャワハラル・ネール、マウラナ・アブザール・アザード等は印度人の間に多數の支持あり、而も印度政廳の大量逮捕に依つて諸懸案は些かも解決されず、却つて英印兩國間の深刻な乖離を尖鋭化したに過ぎない。印度の民主々義領袖を引續き逮捕して置くことは反権軸陣營が公言した戰争目的に對する挑戦であり、眞の文明が據つて立つ民權の廣汎な原則に對する否定である。印度の自由は印度だけで問題では無い。人類自由の問題である。最近ガンディ翁は健康上の理由で釋放され、印度の政治的行詰りを開く爲思ひ切つた提案を出して居る。是等の提案に對しては充分検討を加へる必要あり、ガンディ翁が會議派の領袖並に執行委員の同志と協議出来るならば提

る國民軍は攻撃を再開せる曉再び彼等を擊破し得るのである。印度國民軍の軍事作戦が對峙状態に入つた今日、東亞の印度人は課せられた責務は此の中間期を利用し、次期攻勢に對する強力なる準備を爲すに在る。而して此の目的を以て人、金及び物資の總動員を完成すべきである。本大會は昨年以來指導者スパス・チャンドラ・ボース氏に依り與へられたる訓戒、即ち印度の戰ひは歴史上最も困難なる戰ひの一つなる事を想起し、全印度人に對し最大の犠牲と血を躋はなくて獲得し得ざる自由に對して準備すべき事を要望す。本大會は印度解放戰に付れた英靈に敬弔の意を表し、又顯著なる功績を立てたる勇士に衷心より祝意を捧げる。最後に本大會は日本及び其同盟國と共に有らゆる環境を共にし而して如何なる艱難辛苦にも邁進し我等の共同の勝利を獲得し印度が外國の抑壓から解放される迄戰ひ續ける可き誓ひを此處に強調す。」

米國と印度

自由印度假政府代辦者アイヤー宣傳部長は九月一日新聞記者團との會見で米國が戰後の印度に對する指導權を獲得せんとしている傾向を指摘次の如く述べた。

「最近米國は印度への關心をさらに深め印度に對する施策を彼此と並べて居る、假令ば戰後の世界組織會議に印度代表を招聘したり印度との間に民間航空に關する取極めを行つたりして居るのは米國の印度に對する關心のゼスチニアである、殊に後者の場合に於て米國は英本國を無視して英印政府と直接交渉を行つたが、是は印米間の問題に對する意圖の奈邊にあるかを推察するに足る。嘗て一九四二年から四三年にかけルーズベルトの特使として印度を馳け廻り

度問題紛糾の責任は總べて英國政府に在り、英國が現在の如き印度政策を續ける限り、印緬方面に於ける反樞軸軍の作戦にも重大な支障を與へよう。」一方ワシントン駐劄英國大使ハリファックスは、フィリップス召還問題が米國政界の重大問題化したのに周章狼狽して一日左の釋明聲明を發表した。「フィリップスの米國召還が英國政府の要求によつて行はれたとの印象が、米國內で深まつて居るのは遺憾である。フィリップスの場合には勿論英國政府は今までに一度も英國に派遣された米國使臣に對して其の退去を要求した事は無い。」

在米印度人の活動

九月一日のニューヨーク電報に據れば、歐洲侵攻反樞軸軍政治顧問フィリップスの召還をめぐつて米國內では再び英國の印度政策に對する反対運動が展開されるに至つたが、此の氣運に乘じて米國にある印度人達は米國の輿論に訴へて彼等の目的を達成すべく猛烈な反英運動を開始した。米國には印度人の結社として『自由印度國民委員會』なるものがあるが、此の委員會は今週その機關誌として『印度の聲』なる雑誌を新たに刊行したが、其の巻頭言で『印度の組織的な聲が是非華府できかれるやうにしなければならぬ。我々の叫びは公式な聲ではないが、印度民衆の悲痛な要求を最も忠實に傳へる聲である。』と述べ、印度獨立運動が米國の朝野に積極的な働きかけを行ふ事を示唆した。自由印度國民委員會には南加大學の印度人教授フッセイン、著述家シング・ショリッドハラン等著名な印度人が參加して居るが、ネールの妹も近く米國を訪問して反英運動に参加する豫定と言はれて居る。

在米印度人の活動 フィリップス召還問題

英國の對應印度非難の報告書を書いたフィリップスの名が今日再び出て來で居るのも注目に値する。英國は過般イーデンが下院で述べた如く一千人のフィリップスより一つの印度が英國に取つてより大切であり、又英國の對印態度を非難する米國は一體如何なる印度政策を持つて居るのかと反問して居るやうに、米國最近の對印態度を快よく思つて居ない。兩國の意圖は完全に相反するとは言へない、でも對立狀態に置かれて居る。而も英米共にその意圖の裏面には戰後に於ても印度は奴隸的地位に有る事を當然の事として居るのであつて、要是戰後の印度指導權が英米何れの側に歸するかを問題として居るに過ぎない。然しながら戰後に於ける印度は米英が現在豫想する狀態とは凡そ懸離して居る。彼等は戰ひが終つた時印度が完全に彼等の手から脱し待望の獨立を獲得して居る事實に直面するであらう。印度假政府下の印度人は素より、印度國內に於て印度獨立の念願に燃ゆる革命の志士はそれが爲に準備し戰ひつゝある。英米何れが戰後印度の指導權を握るかと云ふが如きは笑止の沙汰である。」

米國の對英報復決議案

英國政府のフィリップス排斥問題に關し、米國共和黨下院議員方ルヴァイン・ジョンソンは九月一日次の如き對英報復決議案を議會に提出した。

「英國政府がフィリップスを『不同意人物』としてロンドンからの引揚げを要求した以上、米國政府としても當然これに對する報復措置に出るべきだ。差當り政府はワシントン駐劄の英國公使キャンベル及び印度公使シャンナール・バヤラを『不同意人物』として米國から引揚げることを要求すべきだ。フィリップスの指摘した如く印

倫敦電報に據れば、フィリップスの召還問題は米國內の反英論者が絶好の機會とばかり騒ぎ出した爲、意外な重大展開を見せるに至つたが、九月五日のロイター通信は此の問題につき次の通り報じて居る。

「米國の上院議員は彼の言動が國際的に如何なる影響を及ぼすかは毫も意に介しないかの如く、フィリップスが米國に歸還したのは英政府の爲だと一人できめてかゝり、頻に英國を彈劾罵倒して居る。事實、米國内ではフィリップスが英國の印度政策を批判して大統領ルーズベルトに送つた報告及印度政廳外務長官カースがフィリップスの英國追出しを勧告して印度事務相に送つたと稱する電文が全米の新聞に一齊に掲載された爲、フィリップス問題に對して大きな關心が寄せられるに至つた。米國は從來も印度問題に就て相當の關心を寄せて來たが、今回ほど印度に對する米國の關心と干渉とが赤裸々の形に於て米國民の前にぶちまかれた事は無い。この問題が米英兩國相互の猜疑心だけに限られてゐたならば、事件は戰局の發展その他新事件の發生で次第に忘れられて行つたかも知れないが、英國政府の機密電報の内容が漏洩して居る以上、單なる外交的措置のみでは事態を圓滿におさめる事は出來ない。チャンドラーは印度問題こそ米國が斷乎たる態度をとるべき問題だと力み返つて居るが、彼が何故斯様に強い態度をとるかについては、彼の背後に『米國印度聯盟』なる組織のあることを忘れてはならない、最近この印度聯盟には多くの著名な米国人が參加してその勢力は侮るべからざるものとなつたが、今後此の組織は印度問題について熾烈な運動を展開

する可能性がある。」

反樞軸の戦争目的と印度

九月二十七日のデーリー・ワーカー紙はガンジーとの會見談を掲載して居るが、ガンジーは右會見で反樞軸側の戦争目的と印度の自由に就て次の如く述べて居る。「反樞軸陣営は頻りに自由と民主主義とを嘆々して居るが之等は凡て空疎な物語に過ぎず、斯る口頭禪を多とするのは未だ曾つて反樞軸各國の桎梏に苦しんだことの無い人々だけであらう。反樞軸各國の爲搾取されて居る人々はかかる空疎な言葉で何等得る所がない事を百も承知だから反樞軸の標語を問題として居ない。米英兩國民自身が決して之等の理想の爲に戦つて居るのでは無いことを實證して居るでは無いか。凡ての印度人は一人の例外も無く自國が從來よりも更に甚しく外國の桎梏に悩んで居るとはつきり述べて居る。従つて英人に對する『印度から立ち去れ』と言ふ言葉は從來以上に正當である。印度人は飽くまで以上の要求が貫徹されることを主張すると共に戦争が繼續して居る間に英國の桎梏から取除かれねばならぬ事を要求する。」

孟買会談決裂の主要原因

孟買來電に據れば、ガンジーは英紙ニーズ・クロニクルの記者に對して十月三日次の通り言明したと傳へられる。

「會談が遂に決裂したのは自分が全國説に賛成しなかつたからである。回教徒聯盟總裁ジナーは西北國境州、シンド、全パンジャブ、ベンゴール、アッサムの各州を完全に獨立した回教徒國として即時

が直に適當な措置を講ずる事、及びフィリップスが今後、苟も英帝國と關係ある地位に着く時は、英國政府としては彼を『不同意人物』と見做さざるを得ない事を米國政府に通達するやう要求するだらう。余が米國を離れる時はジョンソン及びチャンドラーもフィリップス問題に關する彼等の動議を引込める様だつたし、米國政府も亦米英兩國の親善關係を害する様な事件の再發防止の爲、何等かの措置を講じようとして居るかに思はれた。然るに余はフィリップスが依然として米國大領の信任の下に印度特使に留まる事になつたとの報道を見て驚かざるを得なかつた。余は之を默認する事は出來ない。此の問題は此儘放置する事を許さず、余は最近の機會に之を政府當局の前に提起するであらう。」

蘇聯との使節交換說

最近蘇聯政府が、印度との間に使臣を交換する準備を進めて居るとの噂が頻に流布されて居るが、倫敦來電に依れば英國の印度省は「斯かる途方もない報道に就ては印度省は何も聞いて居ない」と頭から否定したと言はれる。未だ自治領の地位を享受して居ない印度が英帝國以外と外交使臣を交換する事は到底考へられないが、斯かる噂が流布される所にバルカン、西亞、印度を繞る英蘇兩國の微妙な關係が窺知出來よう。

ヒンヅ・マハサバも
ガンジー案に反対

蘇聯との使節交換說 ヒンヅ・マハサバもガンジー案に反対

承認する様希望した、更にジナーは以上の事を國民投票に依つて當事には同意出來なかつた。他の意見の相違は會談の間に明かになつたのであるが、自分が印度の地圖を描き變へる前に英國の支配からの自由を欲したのに對してジナーはバキスタンの即時承認を固執した。更に意見を異にした他の點は回教徒國印度教徒國の關係如何であつて、自分は以上二つの國が共通の政策を有し行政、外交、國防、交通の各分野に於て兩國が互に融和して行く事を希望した。何故ならば此の様な融和は兩國の福祉に取つて缺くべからざるものであると同時に兩國の主權に牴觸するものでは無いからである。」

英國議員のフィリップス彈劾

米國大統領の印度特使フィリップスを繞る米英兩國の確執は英國側のフィリップス彈劾にも拘らず、當人がルーズベルトの承認を得て印度特使居坐りを聲明した爲、俄然蒸し返しの状態となつたが、最近米國を訪問して反英派の上院議員ジョンソン、チャンドラー等とフィリップス問題で泥試合を演じた英國保守黨下院議員レジナルド・ペーブリックは、去る十月三日英國は此の問題で飽く迄其の主張を貫徹すべきだと次の如く言明した。

「余は最近の中に下院で外相イーデンに對し、所謂フィリップス事件の直後英國政府は何故米國政府に對し同人の本國召還を要求しなかつたか其の説明を求める意向である。余は又イーデンに對して今後米英兩國關係を害する様な同種事件の發生を防止する爲に、政府の利益を根柢から覆へす故に反対である。

一、各派間の取極めに就てはヒンヅ・マハサバの同意を要し、同意を俟たぬ取極めはヒンヅ・マハサバに對し拘束力が無い。

一、英國政府が印度に於ける宗教其の他の相違を口實に印度の桎梏撤去を更に遲延させるのを看過しない様反樞軸各國政府に要請する。

委員會は右決議の趣旨をチャーチル、ルーズベルト、スタークに打電した。

印支空輸物資

米國陸軍省はヒマラヤの嶺を越へる印支空輸の近況に就き十月六日の通り發表した。

「米國陸軍航空隊空輸司令部印支管區に依る印度よりヒマラヤを越えて支那に輸送する援助軍需物資は、一箇月四千六百萬封度（約二萬三千短噸）に達した。是等の貨物は航空機用燃料、武器彈藥、自動貨車、ジープ等在支米軍航空隊及び重慶軍と米軍の地上部隊に必要缺くべからざる重要物資を含んで居る。本月に入つて最も多い日は一日二百五十萬封度（約一千二百五十短噸）の重要貨物を輸送したが、此の數量は同管區が運行を開始した一九四二年十一月の一箇月分よりも多い。此日輸送機の參加延回數は五百六十五回に及び、平均して二分三十九秒毎に一機宛ヒマラヤを飛び越えた事になる。一九四四年に於ける此の空輸の飛躍的増加は輸送機の數を倍加した事、

修理及び貨物の積降しに要する時間の縮減、飛行場の増設等に依つて可能となつたものである。一箇月間の輸送でガソリン、爆弾、武器弾薬の外に五噸自動貨車百臺以上、小型自動貨車二百臺以上、搔土器十一臺（一臺の重量二萬五千封度）及びシーパ五十臺を輸送した。此他、本年四月にはスチルウルの総合攻勢を掩護する爲重慶軍の部隊を印度へ空輸した。第二十航空隊の在支那基地駐屯部隊に対する大部分の補給はヒマラヤ越えに依るものであり、支那から米國の軍需工場に送られる戦略的諸物資も此の空路に依つて輸送されて居る。

ニコバル島附近の戦果

大本營發表に據れば、我航空部隊は十月十九日ニコバル諸島カ一ニコバル島に來攻せる敵英機動部隊を邀撃し、同島南方海面に於て敵航空母艦及び驅逐艦各一隻を擊沈、戰艦及び驅逐艦各一隻を擊破した。

米の太平洋正面からする侵攻に呼應し、フレーザー麾下英印度洋艦隊の動きも看取されつたが、マッカーサー部隊の中部比島レイテ灣侵入と同日の十七日朝來、英機動部隊はニコバル諸島カ一ニコバル島西方海面に來襲し、十七、十八、十九の三日間に亘り艦上機と艦砲射撃を以てニコバル島に反復攻撃を加へて來た、我航空部隊は十九日此の英機動部隊に強烈な攻撃を敢行し空母、驅逐艦各一隻を擊沈、戰艦、驅逐艦各一隻を擊破した、戰闘經過次の通り

十七日 午前九時頃、敵艦上機二十數機がニコバル島に來襲、我陣地を銃撃した、續いて敵空母二隻、戰艦二隻、巡洋艦三隻、驅逐艦數隻がニコバル島西方海面に現はれ、午前十時半我飛行場、港灣を

木村緬甸方面陸軍最高指揮官談

「自由印度假政府成立一周年の記念すべき日に當り余は同政府の健全なる發達に對し衷心祝意を表すると共に印度國民軍の旺くなる戰鬪振りに對し深甚なる敬意を表す、余は自由印度の政府及び軍隊が我等の共同戦争目的の完遂に對する努力を倍加せらるゝ事を確信する」と共に、帝國は印度獨立達成の爲凡ゆる可能なる援助を繼續する用意ある事を明らかにするものなり。」

「顧れば印度假政府の一年は實に多事多難であつた、此間スバース・チャンドラ・ボース首班閣下は内には各閥僚と共に清々政府の地歩を固むると同時に、大東亞在住三百萬印度民衆の結束を愈々鞏固ならしめ、出でては印度國民軍を率ゐて皇軍並びに緬甸國軍との緊密なる協力の下に緬印國境各方面に英軍を擊碎し、能く赫々たる武威を中外に闡明し、暴英三百年の桎梏に苦しむ印度民衆の胸底に希望の光明を點じた。今や敵米英は短期決戦を企圖し隨所に無謀なる作戦をして徒に我が至妙なる出血作戦の術中に陥りつつある。太平洋に於ける最近の我が大戦果も緬印支國境に於ける敵の膨大なる消耗も等しく其の證左である。而して敵焦慮の進撃こそは我に取つては將に宿敵覆滅の絶好の機會である。自由印度假政府の念願たる祖国の完全獨立は勿論容易なる業では無いが、首班閣下以下の獻身的努力は能く凡ゆる困難を克服所期の目的を達成さる事を信じて疑はない。我が緬甸派遣軍亦從前と同様全幅的支援を惜しむものでは無い。」

石射駐緬大使談話

「昨年十月二十一日自由印度假政府が樹立されて以來ボース首班閣

バー・モウ國家代表の聲明

自由印度假政府樹立一周年記念日に當りバー・モウ緬甸國家代表は自由印度假政府宛に慶祝の聲明を寄せた。聲明要旨左の通りである。

「世界の歴史に於て印度並びに其の國民を解放するといふ大業以上に加ふるに印度獨立運動は言はば一つの民族革命運動にして印度全民衆の精神に深く根を下し如何なる力を以てしても之を阻止する事は不可能である、必ずや印度の地より敵英米を驅逐し印度獨立の實現せられる日の來らん事を確信する。」

小磯首相等ボース首班を激励

十月二十一日自由印度假政府成立一周年記念日に當り、小磯首相、木村中將及び石射大使は夫々左記の如く祝電を發し或は談話を發表してボース首班を激励した。

約二時間餘に亘つて砲撃した後視界外に去つた、此日の戦闘で我方は敵機五機を擊墜した。

十八日 午前三時頃敵空母一隻、戰艦一隻、驅逐艦數隻が輸送船三隻を伴つてニコバル島西方海面に出現し、午前四時頃ニコバル島サウイ灣及び同島西海岸に對して照明彈の照明下に砲撃を開始し約一時間の後視界を去つた。

十九日 午前九時半頃、我ニコバル島守備部隊は敵艦上機を發見し、續いて敵戰艦二隻、空母二隻、巡洋艦三隻が出現し午前十一時頃ニコバル島に對し艦砲射撃を開始し十二時過ぎ砲撃を中止して南下した、十二時半頃我航空部隊は敵艦隊に熾烈な攻撃を加へ、我猛鷲の攻撃に依り敵駆逐艦一隻、空母一隻の擊沈される状況が、ニコバル島からも判然確認出來た、即ち我攻撃機隊は空母上空を旋回した後爆弾を投下したが、約十箇の爆弾が空母に命中、我必中弾を喰つた敵空母が黒煙を上げると殆ど同時に、我が雷撃機は魚雷二本を空母の中央に命中させ、瞬く間に猛煙が空母を蔽ひ込み、益々擴がつて行つたが、燃て煙が消滅すると、既に海面には空母の姿は無く、海底深く沈没し去つた。此外ニコバル島西方沖合で敵戰艦及び駆逐艦各一隻も擊破し、此日の空戦では敵機四機以上を擊墜した。

小磯首相の祝電

政府が過去一箇年に成し遂げた事業を見て余が眞實なりと思考して居るものである。之と共に其の爲に斯くも莫大な代價が支拂はれた勝利の到來を信じて疑はない。」

ボース首班滅敵の決意を表明

自由印度假政府首班ス・バ・チャンドラ・ボースは去る十月二十

七日日緬記者團と會見、左の如き一問一答を行ひ世界戰局の推移に關して其の確信を披瀝した。

問 豪華沖に於ける日本軍の大戰果に對する感想は?

答 實に胸のすく様な思で喜びに耐へない、此の大戰果は太平洋戰線の主導權が日本の手に移りつゝある事を示すものである。私は大東亜戰爭を三つの段階に分けて考へて居る。第一段階は日本軍の進撃時代、第二段階は敵の總反攻の時期で現在は此の第二段階の最終であると同時に最後の段階即ち日本が戰局の指導權を握る時期に突入して居るのであって、敵の總反攻は既に暁を見せて居る。

問 敵が甚大な損害を顧みず無効と思はれる作戦を強行して來た理由は?

答 物量を持む米國は物的損耗は如何に大であらうと意に介して居ないが戰が長期化するに連れ、人的損耗が増大する事を極度に恐れて居る。從つて一時に膨大な物量を注ぎ込んで短期間に戰争を終了させる事を狙つて居るのである。現在行はれて居る戰は精神力と鋼鐵との戰である。而して體て精神力が鐵量に打ち勝つ事を證明してくれるであらう。

問 歐洲戰局に對する所見如何?

財務部長 N・ラガヴァン

宣傳部長 A・C・アイヤー

補給部次長 パラマナンダ

解放行政知事 A・C・チャタジー大佐

○○聯隊長 グルザラ・シン中佐

運輸官 A・エラッパ

チャーチルの戰況報告

チャーチルは十月二十八日英下院戰況報告で「英國政府としては日本軍に對する大作戦に於て英國艦隊を提供したが、米國政府は右申入れを受入れた、既に英國艦隊の大部分が印度洋にあり云々」と述べ、更に「印緬國境線に於ける戰爭は日本軍を相手とする陸上戰闘として今迄嘗て無かつた最大且つ最も重要な戰である。右戰闘に於て第十四軍は廿五萬から卅萬の犠牲を出した。即ち一九四四年六月迄の戰死傷は四萬他に病氣に罹つた兵士無慮二十三萬七千人、其内多數を後送しなければならなかつた。戰はインペール部隊に迫り更にマニプール全地區に及んだが、此の戰に依つて重慶への米軍の空路基地は擁護され印度は日本軍の進撃を免れたのである。米國新聞界が印緬作戰に就て英軍の技巧と努力とを正しく理解して居ないのは毫に寒心に堪へない。」と述べたと傳へられる。

× × ×
× × ×
× × ×
× × ×
× × ×

チャーチルの戰況報告

自由印度假政府戰時委員會

自由印度假政府は過般來次期作戦に備へて政府部内に最高戰爭指導機關として戰時委員會を設置したが、十月二十六日委員十一名を任命、二十八日附を以て發表した、戰時委員の氏名左の通り

○○團長 M・Z・キヤーニ大佐

○○師團長 アジズ・アーメッド中佐

國民軍幕僚 ハビブ・ウル・ラ・ハーン中佐

國民動員部長 エーサン・カーディル

アグニ神の歌

森林に於て勝ち勇める人間のミトラは隨順を選ぶ・恰も王が不朽にそれを選ぶ如くに。住居の如く快く・慧力の如く愛づべきアグニは燒供を運ぶ神として敬虔なる祭官たれ。

一切の男性的氣力を掌中に握り・祕密に住むて・諸神を恐怖に陥らしめん。心を專にせる人々は・心に於て構成せる讚美を唱上ぐる時・そこに初めて彼を見出すべし。

彼は地を保持せり・あだかも一足の羊中が地を保持せる如くに・彼は實質ある讚美に依つて天を支持せり。家畜の愛らしき足跡を見よ・一切の生命なるアグニよ・密に備の隠れ家に行け。秘密に在りし彼を見出せしもの・天則の流に近づきしもの・天則を遵奉しつゝ彼れを解放せしもの・かゝる人に對して・今茲に彼れは多くの財物を宣示したり。

植物のうちに於ても・彼の偉大性に攀上れるアグニは・一切の生

命なり・水の家に於ける光彩なり・思慮あるものは・衡量してその神座を作れり。(梨俱吠陀一・六七・一一五)